

漢詩神奈川

第 33 号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-304

発行人 香取和之
編集人 久川憲四郎

神漢連のよき伝統を生かそう

神奈川県漢詩連盟会長 香取和之

この度、神奈川県漢詩連盟の会長を三村公二前会長から引き継ぐことになりました。皆様、宜しくお願いいたします。三村会長、長年のご尽力有難うございました。

神漢連は平成一八年(二〇〇六)に設立され、早や十八年目になります。現在、凡そ二二〇名の会員を擁しています。神漢連は、初代中山清会長に始まり、二代岡崎満義会長、三代三村公二会長と引き継がれ、私が四代目となります。事務局長は、田原健一氏に始まり、桜庭慎吾氏、三村公二氏、高津有二氏と引き継がれ、この度、久川憲四郎氏が就任しました。



香取和之会長

この間、神漢連は以下の三原則のもと発展してきましたと認識しています。

- 一、多様な人材が集まり、その意見・経験が生かされる。
 - 二、「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」をモットーとする。
 - 三、毎年「漢詩入門講座」を開催して新規会員を迎え入れ、さらに同期漢詩サークルを結成する。
- 第一項の多様性については、趣味では詩吟や書道の愛好家など、現役時代は民間企業・役所・学校など、いわゆる文科系・理科系・男性・女性、ITに強い人・中国語に堪能な人など…。このような多様性があるので、各漢詩サークルには活気があり、また最近ではZOOMを用いた諸活動や七絶推敲表の開発・活用などに繋がっていると思います。尚、弱点としては、若い会員が少ないことと、漢学・漢詩の正規教育を受けた会員がほとんどいないこと、などです。
- 第二項のモットーについては、私は以下の

- ように受けとめています。
- ①我々は漢詩を熱心に、且つのびやかにゆったりと学び、そして豊かな人生を送るための一助としている。珠玉の詩句への感動、生活のうるおい、描写の妙に触れること、名所旧跡訪問の楽しみ…。
 - ②漢詩を学ぶ活動のなかに、常に漢詩を楽しみ、遊ぶ要素を取り入れる。オンライン吟行会、「自詠自書」、「自詠自吟」…。
 - ③第三項は「金港方式」として、故石川忠久先生からお褒めの言葉を頂いたものです。
 - ①今年も四月から五月にかけて二十六名の方々が全五回の「漢詩入門講座」を受講され、古今の名詩を鑑賞すると共に、「だれにもできる漢詩の作り方」を用いて、七言絶句を一首作れるようになりました。
 - ②やり方としては、講義と共に、神漢連の会員が数名の少人数グループ毎に実作指導を行っています。
 - ③更に、新会員が同期のサークルを作り、そこに作詩レベルの高い会員を講師として派遣し、作詩の学習を自主的に続けています。現在十五のサークルがあり、今回また一つ仲間が増えるのは嬉しいことです。
- このように、神漢連には諸先輩が築き上げたよき伝統があり、それを大切にしながら時代の変化にも対応していきたいと思えます。尚、文末の紹介となりましたが、副会長は経験豊富な水城まゆみ氏と新井治仁氏にお願いして、執行体制を強化しています。

退任された三村前会長、中島前副会長、飯島前副会長、高津前事務局長、新任の新井副会長、久川事務局長にご寄稿頂きました。

会長を辞するに当たって！

三村公二

二年前、八十歳になったのを機に会長を辞するつもりであった。しかし、コロナ禍真っ只中の混乱の時だったので、言い出せないまま一期延長する事になってしまった。しかし、そのおかげというべきか、香取新会長以下の新体制を構築していただく時間が十分にあったので、今年は順調に引き継ぐことができる。

在任中、常に頭にあつたのは、神漢連の一番弱い所は何処か、それを強化するにはどうしたらよいかという課題であった。故石川岳堂先生や窪寺貫道先生に支えられてきた時代にはあまり意識はしていなかったが、神漢連には、中国文学、中でも特に学問としての漢詩を身に着けてこられた方が少なく、その点において連盟を強くリードしていける人材に恵まれていない。私自身、会社卒業後に漢詩の勉強を始めたのであり、中国文学を基礎から学んだわけではないが、それなりに勉強してきたつもりなので、自らを「叩き上げ」と称している。しかし、中国文学・漢詩を学問としてマスターしてこられた先生方とは、その底の深さの違いが歴然としている。砂上の楼閣という言葉があるが、基礎ができていない

という点において、正にそれに近い。竹林舎で代表される優秀な諸先輩方は私とは比べようもない深い知見をお持ちであるが、お一人を除いて、何れも会社卒業後に漢詩を勉強された方々で、大学で中国文学を基礎から学ばれてはいない。

こういう思いを背景として、連盟全体の底上げを図るべく(連盟の弱みを強化するべく)、市川桃子先生、後藤淳一先生、高芝麻子先生と、独力で詩語集を作られた菅原武先生の四人の先生方に神漢連の「特別会員」になって頂いた。そして、事あるたびに相談に乗っていただき、ご指導をいただける体制を作ってきたつもりである。

鷲野全日本漢詩連盟会長にも総会でご講演をお願いできる道も開かれたので、新しい執行部はこの状況を今一度よくご理解いただき、先生方に登場願う機会をもっと増やして、その豊富な知見を十分に活用させていただき、連盟のレベルの底上げを図るよう運営に当たっていただきたいと思います。

会員の中には、十分に勉強しているから先生方に頼らなくても、何の不自由もないと誇る人もいると思うが、詩の持つ深い意味を味わえるレベルに達している、それを連盟全体に波及できる力を持っている事が重要なのである。

退任に当たって、余計な事ながら、これだけは皆さん方に言い残しておきたい。

退任の御挨拶

中島龍一

平成二十九年(2017)からの三村体制から、丸六年になります。大変お世話になりました。

振り返ると、思い出にあるのは平成二十八年の神漢連十周年の記念式典、翌二十九年に実施した、十周年漢詩大会、フェスティバル開催などです。

記念講演は故石川忠久先生の「陶淵明、詩と人生」が印象的でした。横浜市開港記念館一・二階の満席四百八十人、立って聞く人が出るほどの盛況で、三百部用意したパンフレットが品切れとなり来客に謝ったことなど、先生の絶大な人気を懐かしく思います。フェスティバルでは詩語カードを使って詩句作成とパソコン編集などで、初心者個人指導をしたことも思い出です。また、「歩こう神奈川漢詩八十景」の出版も皆さんの努力の成果でした。

漢詩大会は、全国に応募をかけて、横浜、中華街などを詩題とした二百七十首について、選評・表彰を行いました。この時の選評に当たったの「石川語録」を紹介しましょう。

1. 詩がこなれているか。
2. 風格があるか。
3. 起承転結の構成があるか。
4. 文字の働きがあるか。
5. 用語の上品さや結句のオチの有無。

総じて「なにか目立つもの、なにか人の気付かない視点を見出せば勝ち」ということでした。漢詩稽古の指南として今も有難く受け止めています。

以上、ご挨拶に代えさせていただきます。

漢詩と我が人生

飯島敏雄

高校時代の漢文の授業の時に学んだ「帰去来辞」「五柳先生伝」、および「李白」や「杜甫」の詩に受けた感動は八秩の今でも心に深く残っている。工業高校を卒業して会社勤めをしていた時に社報に日頃の思いを投稿する記事の中には「花にも涙を流し」等の漢詩の一節を入れたりしていた。またその後大学の工学部の機械工学科で教鞭を執るようになった時も学生に配布した機械工学の演習問題用紙の下部には「四書五経」や漢詩を載せて学生に機械工学との学びを関連付けて話をしていった。四十五年勤めを終えた直後に友人の「川上修己さん」から「神漢連」に「初心者入門講座」という漢詩の勉強の場があることを伺ったので、早速入会して本格的な漢詩の勉強が始まった。講座の終了後に十五名の同期生で「五友会」を結成した。指導の「田原健一先生」と「高津有二先生」の提出詩の批評は目から鱗が落ちる思いで聞いた。その後、ホームページを作った経験が有ったので神漢連のホームページの立ち上げから、月々の更新など九年ほど手伝いをさせていただいた。神漢連での役が軽くなった今日は蘇軾も懂れている「桃源郷」に辿りつける道を杖を携えながら探し歩き、見つければそこで酒を詩友と飲酒しながら好きな碁を楽しみたい。



神漢連に感謝です！

高津有二

横浜開港一五〇周年記念の漢詩大会で漢詩の募集があると知って、当時の故田原事務局長に電話したのが、最初のご縁で、その日の会話を今でもよく覚えています。早速、漢詩の応募と初心者入門講座を受講しました。神漢連でお世話になって十四年、後半は、執行理事とか事務局長を務めさせて頂きましたが、本当にお役に立てたのかなと内心忸怩たるものがあります。

第三期生(好文会)として入会してからの出来事を「漢詩神奈川」を見ながら思い出してみました。実に多くのことを経験させて頂きました。故石川先生と毎年ご一緒した恒例の吟行会、バトル漢詩甲子園、盛会裏に実施された十周年記念行事、西安、敦煌の中国漢詩ツアーと、思い出は尽きません。

何と言っても漢詩を通して多くの人と知り合いになり、楽しい時間を過ごさせて頂いたこと(今も続いています)は、私の人生の宝物であり、神漢連に感謝以外の何物でもありません。

パソコン、スマホの時代へと漢詩勉強のツールに変化はありますが、漢詩の真髄は変わりませんので、これからも少しでも神漢連のお役に立てれば幸いです。

「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を「漢詩を学ぶ、漢詩を楽しむ」に読み替えて、これからも漢詩と共に歩いていきます。

「人財活用」で気軽に楽しい交流を！

副会長(新任) 新井治仁

連盟加入後、あつという間に十五年。博学の先輩諸氏、多芸多才の友人達と濃密な時間と思い出を育むことができました。これも、神漢連の人財豊富さと多様性によるもので、この財産をもっともつと深掘りし、連盟内外に発信していければと思います。

それには、詩作、鑑賞、サークル討論など色々な場面で多角的に、気軽に且つ生産的な雑談、交流が大切です。時には会員だけでなくZOOM利用の土日企画で、勤労者、学生及び直し層、時に海外居住者へ訴求するなど皆で知恵を持ち寄りたいものです。

「有朋自遠方來、不亦樂乎」は至言です。ご助言、ご協力宜しく！

事務局長就任にあたって

事務局長(新任) 久川憲四郎

先の総会(五月三十日開催)での人事(案)承認により事務局長に就任致しました久川憲四郎です。どうぞ宜しくお願い致します。

私は漢詩入門講座の三期生で好文会に所属しています。入門講座受講時に知っていた漢詩は、唯一つ、国破れて山河在り、で始まる杜甫の「春望」でした。漢詩の知識は無きに等しく勉強の方法も手探りでスタートしたのが十六年前で現在に至っております。

このような私が皆さんのお役にたてるかどうか自信はありませんが、与えられた責務を一杯務めて参りますので、何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

連盟の行事

令和五年度第十八回定期総会

事務局長 久川憲四郎

本年度の第十八回定期総会は五月三十日、神奈川県近代文学館ホールにおいて、ご来賓の鷲野正明全日本漢詩連盟会長にご臨席を賜り、会員約六十名が出席して開催された。

総会の冒頭で挨拶に立たれた三村会長が報告事項を終えたあと、進行を新執行体制にお願いする旨の発言、了承された。従って、議長席には新会長予定の香取和之氏が着席し、議事進行に入った。

次いで、活動報告、今後の活動計画と決算報告、会計監査報告、令和五年度予算計画(本頁中段参照)並びに人事案(本頁下段参照)が新事務局長予定者及び会計担当者から提案され、承認された。

人事面では、会長、副会長、事務局長、事務局次長、執行理事、監事、運営委員等が承認され、新たな執行体制がスタートした。

総会後の漢詩講演会では、来賓の鷲野正明先生が「旅する杜甫」を講演され、会員以外の参加者も含め、百四十名強の聴講者があった。講演内容は、YouTubeに収めて、全国各県連にも送付し、好評を博している。

令和四年度決算・五年度予算

| 令和4年度一般会計決算 | | | 令和5年度一般会計予算 | | | 令和4年度田原基金決算 | | | 令和5年度田原基金予算 | | | | |
|-------------|-------|-----------|-------------|-------|-----------|--------------------|-------|-------------|-------------|---------|---------|-------|-----------|
| 区分 | 費目 | 金額 | 区分 | 費目 | 金額 | 区分 | 費目 | 金額 | 区分 | 費目 | 金額 | | |
| 収入 | 前年度繰越 | 580,590 | 収入 | 前年度繰越 | 650,920 | 収入 | 前年度繰越 | 858,526 | 収入 | 前年度繰越 | 902,045 | | |
| | 年会費等 | 753,500 | | 年会費等 | 933,500 | | 叢書頒布 | 45,520 | | 叢書頒布 | 30,000 | | |
| | 行事参加費 | 54,900 | | 行事参加費 | 402,000 | | その他収入 | 0 | | その他収入 | 1,000 | | |
| | その他 | 137,100 | | その他 | 21,000 | | 収入計 | 904,046 | | 収入計 | 933,045 | | |
| | 収入計 | 1,526,090 | | 収入計 | 2,007,420 | | 支出 | 2,001 | | 支出 | 20,000 | | |
| 支出 | 庶務費 | 216,335 | 支出 | 庶務費 | 570,000 | 支出 | その他雑費 | 0 | 支出 | その他雑費 | 25,000 | | |
| | 広報事業費 | 153,374 | | 広報事業費 | 190,000 | | 支出計 | 2,001 | | 支出計 | 45,000 | | |
| | 教育事業費 | 283,903 | | 教育事業費 | 570,000 | | 残 | 次年度繰越 | | 902,045 | 残 | 次年度繰越 | 888,045 |
| | 全漢連費 | 217,728 | | 全漢連費 | 242,500 | 令和4年度末神奈川県漢詩連盟資金残高 | | | | | | | |
| | その他 | 3,830 | | その他 | 130,920 | | | | | | | 一般会計 | 650,920 円 |
| | 支出計 | 875,170 | | 支出計 | 1,703,420 | | | | | | | 田原基金 | 902,045 円 |
| 残 | 次年度繰越 | 650,920 | 残 | 次年度繰越 | 304,000 | 合計 | | 1,552,965 円 | | | | | |

(単位:円)

令和五年度人事

☆理事

古田光子 岡田泰男 横山真吾 桜庭慎吾
 室橋幸子 中島龍一(新) 飯島敏雄(新)
 高津有二(新)

☆執行理事

香取和之(会長・新) 水城まゆみ(副会長)
 新井治仁(副会長・新)

久川憲四郎(事務局長・新)

東島正樹(事務局次長・新)

瀧川智志 山口幸雄 蔦 清昭 柴本信子
 白石信隆 五嶋美代子 高橋純子

牛山知彦(再) 高田宗治(新)
 ☆監事 松井秀人 鈴木正敏

☆特別相談役 岡崎満義 三村公二(新)

☆相談役 住田笛雄

☆顧問 窪寺 啓 浅岡清明 池上一利
 ☆役員退任 理事退任 玉井幸久

☆運営委員 家吉幸二 岩波弘道 竹村文孝
 田川行雄 橋本孝一 中村講二
 内山早奈江 田内 隆

☆運営委員退任 川喜田康 安藤啓子

(参考)

☆特別会員 市川桃子 高芝麻子

後藤淳一 菅原 武

☆竹林舎 玉井幸久 飯沼一之 古田光子
 住田笛雄 桜庭慎吾
 三村公二(新) 水城まゆみ(新)
 中島龍一(新) 高津有二(新)

オンライン吟行会

「熱海梅園にて」(二月二十七日開催！)

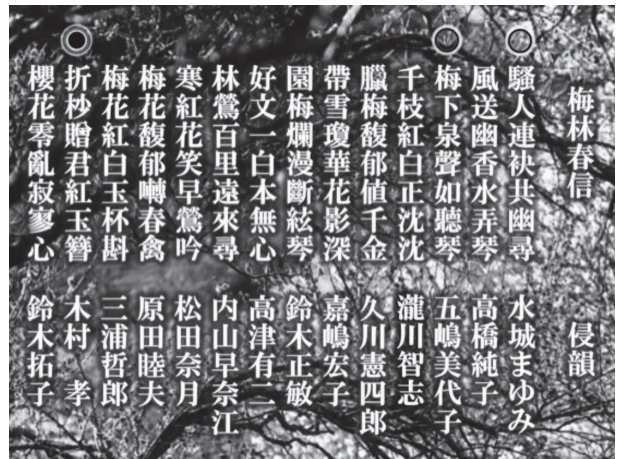
～新会員歓迎を主眼に開催～

神漢連十五周年記念行事として始まり、その後「櫻淵夢幻」(千鳥ヶ淵)、「尾瀬散策」(尾瀬高原)をテーマに各自書齋から自由な雰囲気でお交流をあげてきました。

今年の第一回は、昨年度新サークルの「既望会」等、新しい方々を歓迎する目的も含め初春の梅を熱海に尋ねました。柏梁体に代え詩作に役立つ七絶規則で投稿するやり方も定着し、約三十の句は、いずれも名句が競い、連句講師(水城、香取両先生)も選考に悩まれた所です。

講評にも参加者への助言が数多く含まれており意見交換等、時間を忘れる盛り上がりでした。参加者には、事前に熱海の現地を實際に訪れ投句に備えた方もおられ、一同びっくり、自ら楽しさ、思い出を倍増させる工夫に感心させられたことでした。今後も夏冬の年二回、サークル間のサロンの場として活用いただきたいと思います。又、世話役各位のご尽力で中身の濃いこのツールを気軽に使って例会、他サークルと交流を進めるための企画にも対応していくつもりです。次回は八月二十四日(木)の予定です。

是非名所、穴場など広く候補地をお寄せ下さい。
(新井治仁)



梅林春信

侵韻

騷人連袂共幽尋 水城まゆみ

風送幽香水弄琴 高橋純子

梅下泉聲如聽琴 五嶋美代子

千枝紅白正沈沈 瀧川智志

臘梅馥郁值千金 久川憲四郎

帶雪瓊華花影深 嘉嶋宏子

園梅爛漫斷絃琴 鈴木正敏

好文一白本無心 高津有二

林鶯百里遠來尋 内山早奈江

寒紅花笑早鶯吟 松田奈月

梅花馥郁嘯春禽 原田睦夫

梅花紅白玉杯斟 三浦哲郎

折杪贈君紅玉簪 木村孝

櫻花零亂寂寥心 鈴木拓子

オンライン吟行会に参加して

志詩会 木村 孝

「漢詩で学ぶ、漢詩で遊ぶ」は神漢連の motto だが、神漢連の催しの中でも「遊ぶ」の要素が最も色濃いのがオンライン吟行会ではないだろうか。

まずは用意していただいた映像で観光。家に居ながら絶景を楽しむことができる。次にガラガラポンで韻字が与えられる。これには当たりはずれがあるが、これも「遊び」のうちと考えよう。ここには2つの文字から選べるといふ救済措置もとられている。韻字が決まったら漢和辞典と詩語集を頼りに七言一句を拈る。締め切りまでじっくり考え、満を持して投句する。集められた句で人気投票が行われるのも参加型で楽しい。



梅林春信

尤韻

溪澗香風爛漫游 福田忠夫

瓊姿燦爛滿山丘 細江利昭

素葩連綴古枝頭 蔦 清昭

梅開清景幾回頭 東島正樹

山園梅雪亂無休 佐藤三祿

仰望芳姿瀑裡幽 新井治仁

破蕾芳香溪澗幽 諸星暢義

芳姿競色映春洲 鈴木潔州

滿園香雪路悠悠 牛山知彦

梅花勝景畫中收 松本祐輔

看梅吟詠盡風流 飯島敏雄

梅香鶯嘯更何求 白石信隆

梅溪曳杖更何求 高橋光代

春光花發暗香流 佐竹信一

横斜疎影暗香浮 香取和之

吟行会当日は司会の進行と講師によって手際よく連句が作られて行く。神漢連オリジナルの吟行会ツールがあつて毎回改良されている。今回は事前に人気投票が行われていたので、ここもスムーズに進んだ。投句集計やツールの準備など目に見えない裏方作業のおかげで参加者は気軽に楽しめる。すべての投句に対して講師からコメントをいただけるのもうれしい。優秀句や人気句の発表に一喜一憂するうち、あつという間の3時間が過ぎた。

吟行会終了後、投句した七文字を結句に置いて絶句に仕立ててみた。普段から詩題に苦勞している身にはありがたい材料だ。さあ、次回の吟行地はどこだろう。

『旅する杜甫』
— 鷺野正明先生講演会 —

令和五年五月三十日(火)神奈川近代文学館に於いて、全日本漢詩連盟会長の鷺野正明先生による『旅する杜甫』の講演会が開催されました。会場は百四十名を超える来場者で盛会でした。

1. 混乱のなかで

杜甫四四歳の時、安祿山の乱が起こります。翌年家族を鄜州に疎開させ単身で肅宗の行在所に向かいますが、途中賊軍に捕らえられて長安に幽閉されます。その時に奥さんを書いて作った詩、これが「月夜」です。

| | |
|-------|-------|
| 今夜鄜州月 | 閨中只獨看 |
| 遙憐小兒女 | 未解憶長安 |
| 香霧雲鬟濕 | 清輝玉臂寒 |
| 何時倚虛幌 | 雙照淚痕乾 |

一句目妻が鄜州で月を看着いるだろう、と言います。普通、離れ離れになっている時は自分が月を見て綺麗だと思ひ、そこから連想して妻も看着いるだろうかと詠います。が、杜甫はその一般的な作り方を変え、自分が長安の月を看着いることは言いません。これが非常に新しい詠い方です。只だとは只だ独りではなく一人で見るしかない状態という意味です。

憐れむとはかわいそうではなく可愛いと思うこと。杜甫にはこの頃四人の子供がおりました。杜甫が長安に捕らわれの身であることもまだ理解できないほど幼い子らが寝静まり、月を眺める妻の髪を夜霧がしっとり潤しているだろう。「臂(ひ)」とは肘から手首までのこと。一般的に唐の女性は袖の長い服を着用していましたので、玉のようなすべすべした臂が寒そうに月に照らされているということは、頬杖をついているのでしょうか。奥さんのことをとても綺麗に詠っていますね。そして、今は別々に看ている月を、嬉し涙が乾くまで一緒に眺める日がいつ来るであろうかと詠います。



講演される鷺野正明先生

四六歳の時、長安を逃れ、鄜州に妻子を迎えに行くことができた時の詩が「羌村」です。妻との再会、今までのいきさつを話していると隣近所の人たちまでが集まってきて泣いています。こうした一幕があり夜の場面です。更に燭を乗るとは子供たちを寝かせて改めて

灯をとますこと。そして向かい合うと夢のようだと云います。ここに月は出てきません。二人の間にあるのは二人の顔を照らす灯です。どんなに嬉しかったことでしょうか。

2. 辺境放浪

さて、杜甫は官を棄て妻子と食料を求めて秦州に行きます。次の「秦州雜詩」はそこで作られました。

| | |
|-------|-------|
| 鼓角緣邊郡 | 川原欲夜時 |
| 秋聽殷地發 | 風散入雲悲 |
| 抱葉寒蟬靜 | 歸山獨鳥遲 |
| 萬方聲一概 | 吾道竟何之 |

辺境の塞は夕暮れになると太鼓が打ち鳴らされ角笛が吹かれます。その音が、地の底から湧いてくるようで、風に散り雲に入って悲しみをたたえていると言います。この音の表現が杜甫の気持ち、あるいは戦争に駆り出されている兵士の悲しみでもあります。葉にしがみついている蝉は、何か言いたいけれど何も言えず一縷の望みにしがみついている自分を、群れからはぐれのろろと飛ぶ一羽の鳥は、行く当てのない杜甫の気持ちです。風景描写でありながら、気持ちも詠う。これを「情景一致」と言います。食料があると聞いて秦州に来たものの無く、どこへ行っても戦争の音が聞こえてくる。私はどこへ行ったらよいのだろうか絶望を詠っています。

3. 成都の草堂で

更に食料を求め劍閣を越えて四川の成都に行きます。友人の嚴武が節度使としてやってきて生活を援助してくれました。ですから、この成都にいる時だけ平和な生活を送っており、詩もゆったりとした詠い方になります。それを感じられる「春夜喜雨」は、五十歳の時の詩です。

好雨知時節 當春乃發生
隨風潛入夜 潤物細無聲
野徑雲俱黑 江船火獨明
曉看紅濕處 花重錦官城

良い雨は降る時節を知っており草木が繁る。その雨は風のまにまにひそかに降り出し音もなく万物を潤します。白く乾いた中国の大地が春の雨で黒々となると、とても嬉しい。ですからこの黒は暖かいイメージです。川に浮かぶ舟の紅い漁火が灯っています。この夜に見た一点の紅が最後の聯に向けて広がっていきます。明け方には街いっぱい紅い花が雨に濡れ重々しく、重なるように咲いている。詩の中には「喜ぶ」とは一つも出てきませんが、嬉しい気持ちを表しています。

4. 長江を下って

「旅夜書懷」は杜甫の孤独を詠います。

細草微風岸 危檣獨夜舟
星垂平野闊 月湧大江流
名豈文章著 官應老病休
飄飄何所似 天地一沙鷗

わずかな風でも揺れてしまうような細かい草。心震える悲しみを詠います。目を外の大自然に向けると自分はもとちとつげなのだろう。有名になることなんて望まないが官僚は老病の身ではやめなければならぬ。あちこちさまよう自分は一体何に似ているのか、まるで天地の間をさまよう一羽の鷗だと言います。何とも寂しいですが、前向きな生き方が伝わります。貧乏でも妻子を連れて食料を求めて旅をする。そして、詩を作り続けるわけですからね、エネルギーがないとできません。杜甫の詩はいいですね、読めば読むほど面白くなります。一步一步詩を読んでいくと良いですね。

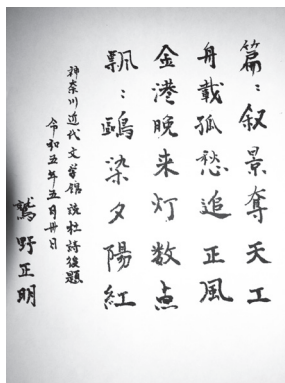


熱心に聴く多数の来場者

鷺野先生のとて細やかな解説で、時代状況に翻弄されながらも詩作意欲を絶やすことのない杜甫の強さを感じられた時間でした。この講演会にあたり鷺野先生より玉韻を頂戴しましたのでご紹介いたします。

神奈川近代文学館讀杜詩後題

篇篇敘景奪天工 篇々叙景天工を奪い
舟載孤愁追正風 舟は孤愁を載せて正風を追う
金港晚來燈數點 金港 晚來 灯数点
飄飄鷗染夕陽紅 飄々として鷗は夕陽に染りて紅なり
令和五年五月三十日 鷺野正明



詩の前半は、講演で話した内容をまとめています。杜甫の詩は、すべて叙景がすばらしいこと、孤愁を抱きながら舟で移動したこと、平和な世界を願っていたこと、を言っています。「正風」は『詩経』でいう「正風」「変風」の「正風」です。後半は、講演が終わったあとの夕暮れの横浜港。結句の「飄飄鷗」は講演で読んだ「旅夜書懷」「飄飄何所似 天地一沙鷗」を意識した句です。夕陽に紅く染まる鷗は、もとより神漢連の発展を籠めています。

記 高橋純子

十七期漢詩入門講座開催 ―新たな仲間が神漢連に入会―

令和五年度漢詩入門講座(旧初心者改称)

は四月十三日から五月二十四日の間五回の日程で開催されました。漸くコロナ明けの開催となり、計二十六名の方が参加され、昨年に続き最後まで熱心に受講されました。伝統の寺子屋指導は五班で講師の先生方総出で対応、質疑に時間を忘れる盛り上がりとなりました。今回の特色は、男性十六名、女性十名うち東京、埼玉、千葉など六名が見え、本講座が広域で認知されてきているのが窺われました。年齢は六十後半〜七十前半を頂点に、中国駐在経験者、詩吟、書道指南など多彩な顔ぶれで、既に十八名の方が新加入されるなど連盟に新たな息吹が期待されます。



初めてで難しいことが多い!

今後十七期サークルとして次の陣容で発足する予定です。
サークル世話人代表・吉池純さん、世話人小林豊朗さん、伊藤邦彦さん、岡田一郎さん。講師は新井治仁、

東島正樹の各役員です。

最終日の卒業詩二十首の講評で表彰された作品は次の通りです。(新井治仁)

最優秀賞

梅天閑詠

梅天閑詠

小林豊朗

梅天黙坐小齋中

梅天黙坐す小齋の中

煙雨模糊暗半空

煙雨模糊として半空暗し

雙燕歸來人不到

双燕帰り来たるも人は到らず

寂然酌酒一簾風

寂然と酒を酌めば一簾の風

優良賞

山寺散策

山寺散策

伊藤邦彦

山中佛閣寂無聲

山中の仏閣寂として声無く

煙雨濛濛萬物生

煙雨濛々万物生ず

數刻恍然詩未就

数刻恍然詩未だ就らず

忘歸塵外賞心傾

帰るを忘れ塵外賞心傾く

偶成

偶成

吉池 純

淡淡穿牆十日霖

淡々と牆を穿つ十日の霖

蕭然點滴碧苔侵

蕭然たる点滴碧苔を侵す

蝸牛不動窓前竹

蝸牛動かず窓前の竹

薄暮冥冥煙雨深

薄暮冥々煙雨深し

晩春有感

晩春有感

岡田一郎

老松高聳浴春光

老松高く聳え春光を浴び

燕子歸來一草堂

燕子帰来す一草堂

師友論詩無限興

師友詩を論じて 無限の興

揮毫半日俗情忘

揮毫すること半日俗情忘る

漢詩入門講座に参加して

小林豊朗

前々から漢詩を作ってみたくて思っていたが、機会を得られずにいました。そんな時に「定年時代」という新聞で漢詩入門講座受講生募集の記事を見て応募してみました。

この三月まで四十数年間、高校で国語と書道を教えていたので、漢詩は随分授業で扱いました。しかし私自身は漢詩を作ったことはなく、「平仄」もよく知らなかったのです。

今回の講座で、漢詩には様々な規則があることを知り、それに従って「だれ漢」の詩語表と首っ引きでストーリーを作り、平仄を合わせ、漢和辞典を夢中で引いて漢詩を作っていると、気分はもう唐の詩人という感じで、かつて経験したことのない喜びを味わえました。今後さらに勉強を続けたいと思います。ただ残念なのはこの喜びを生徒たちに伝えられなかったことです



熱心に講義を聴く受講者

会員の活動

会員の活動「現状と展望」

事務局長 久川憲四郎

神漢連の活動の二本柱といえる漢詩サークルの活動と、漢詩鑑賞会の活動は、この一年間コロナ禍にありながら様々な障害を乗り越えて活動を継続され、お世話頂いた役員の方々、講師の先生方に厚く御礼申し上げます。

サークル活動は、十五のサークルがコロナ禍の中でもメール、文書による交流、ZOOMあるいは対面方式と、夫々の実情に応じて工夫を凝らし継続実施されました。サークル活動の問題点は、高齢化に伴うサークル員の減少傾向と講師の先生不足であり、サークルの統廃合は喫緊の課題になっています。

漢詩鑑賞会は、鑑賞会A・B・C・霧笛女子会の四つがあり、コロナ禍の中でもZOOM方式を中心に継続実施されました。漢詩を讀んで楽しみたいということでトータルとして参加者が増えていることは、大変喜ばしいことです。ZOOMでは自宅で気軽に参加出来ることから、ポストコロナでもこの方式で実施して欲しいとの声が多く聞かれ、事務局の検討課題となっています。

他に、神辞会グループによる推敲表等の利用方法の説明会も頻繁に開催されております。また、自詠自書の会も令和五年度総会開催日を挟んでの作品展示会が行われました。

令和4 (2022) 年度サークル活動状況

| 開始年、区分 | サークル名 | 会員数 | 代表者 | 指導者 | 開催月・曜日 | 主な会場 | 特記事項 |
|-------------------|-----------------|-----|-------|---------------|------------|-----------------------------------|--|
| H19、1期 H30、12期 | 金星干支会 | 9 | 五嶋美代子 | 三村公二 新井治仁 | 奇数月 第2火 | 県民センター | 昨年度から金星干支会。題詠と自由題のどちらかで作詩。地球市民プラザ化県民センターで会場で開催。 |
| H20、2期 H25、7期 | 三水・七歩会 | 8 | 中島龍一 | 古田光子 | 奇数月 第3水 | 八洲学園大学 (高島町) | 対面で指導・研修している。課題詩(時に自由題)。 |
| H21、3期 | 好文会 | 7 | 高津有二 | 玉井幸久 | 偶数月 第3木 | すべてZOOM | 8月を除く偶数月5回、全てZOOM。10月、2月は神辞会幹事グループから連句方式の七言絶句の提出があり、盛り上げて頂いた。 |
| H22、4期 | 詩游会 | 10 | 新井治仁 | 住田笛雄 | 偶数月 第3火 | 神奈川県立 公文書館 | 8月を除きほぼ対面で開催。実働5-6名。今後に向け詩集発行、若手サークルなどとの合併など意見交換。11月末には鎌倉への吟行会を実施。 |
| H23、5期 | 五友会 | 7 | 飯島敏雄 | 住田笛雄 | 偶数月 第2木 | 4月-12月までZOOMで開催、 2月はかながわ県民センター | 12月まではZOOM、2月は対面開催。会員も少なくなり11期生の詩友会と次年度から合併が決まった。 |
| H24、6期 | 以文会 | 10 | 香取和之 | 桜庭慎吾 | 奇数月 第3木 | かながわ労働プラザ。 又は、紙上批評。 | コロナ禍等により、主としてメールによる会員相互の意見交換(互評)と、先生による批評を行った。2回は例会会場にて対面式。 |
| H24、岳精会 | 岳精会漢詩 研究会 | 7 | 家吉幸二 | 三村公二 | 偶数月 第2水 | 岳精流日本吟院総 本部(川崎市川崎区) | 対面式で開催。講師批評、質疑応答、ディスカッション形式。例会始めに全員で「岳精会会詩」を合吟、終わりに「自詠自吟」で納めている。 |
| H26、8期 | 八起会 | 10 | 橋本孝一 | 中島龍一 | 奇数月 第3木 | 技能文化会館、男女共同 参画センター横浜南 | 4-8人位で推移。詩稿提出は兼題・自由題で二つまで可能。 |
| H27、9期 | 九詩期会 | 13 | 山口幸雄 | 古田光子 | 奇数月 第2木 | 八洲学園大学 (高島町) | まだコロナが続いたが、全回対面で実施した。 |
| H28、 千代田岳精会 | 千代田岳精会 漢詩研究部 | 9 | 田川行雄 | 桜庭慎吾 香取和之 | 偶数月 第2木 | 新宿文化センター | 新型コロナウイルスが収まって以降は対面での例会が開催されている。 |
| H28、10期 | 十期会 | 9 | 高田宗治 | 高津有二 | 奇数月 第3木 | 横浜市戸塚公会堂 | 11月に代表が交代した。定例会はZOOM方式が4回、対面方式が2回実施した。 |
| H29、11期 | 詩林会 | 5 | 白石信隆 | 中島龍一 飯島敏雄 | 偶数月 第2水 | 県民活動センター 神奈川労働プラザ | 定例会開催5回、すべて対面。12月に五友会との合併を決定。新サークル名「五友詩林会」。令和5年4月より。 |
| R1、13期 | 令和会 | 9 | 竹村文孝 | 松井秀人 | 奇数月 第1火 | 横浜市西区福祉活動拠点「フクシア」 | 対面開催 4回、ZOOM開催 2回 |
| R2.14期 | 志詩会 | 7 | 東島正樹 | 香取和之 牛山知彦 | 偶数月 第3月 | かながわ区民活動センター | 例会6回開催。会員は1名減って7名(女性3名、男性4名)。 |
| R3・15期 | 逸語会 | 11 | 田内隆 | 水城まゆみ 高田宗治 | 奇数月 第1火 | かながわ県民センター | 定例会開催 6回(全て対面)。1月に代表者交代。 |
| R4・16期 | 既望会 | 9 | 内山早奈江 | 高津有二 白石信隆 | 偶数月 第2火 | 神奈川近代文学館 | R4年10月発足、10月、12月、2月の3回開催。 |
| 計 | 16サークル | 140 | | | 奇数月8、偶数月8 | | |

注：5期五友会と11期詩林会は合併して令和5年4月より「五友詩林会」となった。(合計15サークル)

漢詩鑑賞会一覧

| 名称 | 講師 | 曜日・時間 | 会場 | 問合せ先 | 概要 |
|-------|---------------------------|------------------------|----------------------|-----------------------|----------------|
| 鑑賞会A | 桜庭慎吾、三村公二 | 第4木 13:30-15:45 | ZOOM | 白石信隆 080-3471-6618 | 宋詩鑑賞 |
| 鑑賞会B | 住田笛雄、水城まゆみ | 第4金 13:30-16:00 | ZOOM | 高田宗治 090-1841-6764 | 聯珠詩格の鑑賞と詩作 |
| 鑑賞会C | 中島龍一、新井治仁、 香取和之、高津有二 | 第4火 13:30-16:00 | ZOOM又は、 かながわ労働プラザ | 新井治仁 045-432-5438 | 御定佩文齋詠物詩選の七言絶句 |
| 霧笛女子会 | 古田光子、水城まゆみ、 横溝比呂美、大森冽子 | 偶数月、第1火 13:00-15:00 | 神奈川県民センター | 水城まゆみ 0463-87-2657 | 各講師の講義 |

五友詩林会の発足について

五友詩林会 白石信隆

五友会・詩林会共に運営上差し迫った問題はなかったが、会員の減少は顕著で、いざれ対策が必要との認識にあった。神漢連本部の合併推進の号令もあり、合併を現実のものとして検討を開始した。合併が原因での脱落者が一人として出ないことを前提に、諸条件を検討した結果、詩林会は五友会なら相手としてこの条件を満たしうると定例会で判断、その場に講師として同席の飯島五友会代表からもこれまでサークル内で話し合ってきた内容からは、五友会としても受入れ可能性は高い旨表明があり、持ち帰り検討してもらった結果、十二月末に急転直下合併が決まった。

正式発足に先立ち、三月十六日(木)にZOOMによる顔合わせ会を実施、会員の自己紹介と各担当の決定、詩稿提出のルールなど会運営の基本について打ち合わせを行った。

四月十三日(木)に神奈川県民センターで第一回定例会を実施、当日は住田先生と会員十一名のうち八名の出席で新サークルが発会した。年次がやや開いたメンバー同士の合併を危惧する向きもあったが、活発な意見交換に終始し、順調なスタートを切ることが出来た。

会後は近くの居酒屋で懇親会を行い、住田先生を中心に和気あいあいの会話が飛び交い、合併したてのサークルとは思えない和やかな雰囲気であった。

自詠自書の会作品展開催と

「超簡単・自詠自書入門講座」開催案内

昨年度はコロナ禍等のため開催のなかった作品展が、神漢連総会・漢詩講演会開催日前後の五月二十八日(日)～六月一日(木)に(二十九日は休館)、大佛次郎記念館会議室で開催されました。



今回は会員十二名の個性溢れる自書作品のほか故石川忠久先生の遺墨を、出品会員が協力して展示を行いました。一四〇名余のご高覧を頂きました。

作品展会場で予告された、書道未経験者のための「超簡単・自詠自書入門講座」開催を左記のとおりご案内します。漢詩をより楽しむ自詠自書の輪を広げたいと思います。

○日程 八月十三日(日) 十三時半～十七時
作品作りのイロハ、書道具店訪問
八月二十七日(日) 十三時半～十六時
書作品作りワークショップ

○会場 横浜市社会福祉センター会議室
神奈川県横浜市中央区桜木町一―一

○参加資格 神漢連会員で作品展未出品者
○申込 jeijisyvo@gmail.com あるいはメール
または080-5521-6735 先着二十名
○参加費 全二回無料・実費 (牛山知彦)

漢詩鑑賞会A ～宋詩の巨人・蘇軾の人生～

鑑賞会A 世話役 鈴木正敏

「宋詩観賞」は本年四月の例会で、二五回となり四年目を迎えた。愉快だった先の唐詩観賞の六年間も速かった。しかし宋詩は、先代の唐詩とは些か、多少異なる気味にある。

特に宋詩を代表する蘇軾の人生には、興味が尽きない。左遷と栄進を繰り返す波乱に富んだ生涯を送り、それに詩も詞(詩余)も、書から描画まで超弩級の才ある万能の文人。生前から大衆的人気が高い。二千四百余詩の全てに、人間的な暖か味とユーモアが満ちて当天性の自由人か。中国六大詩人の一人。

新・旧法の、相違者の王安石に、十五年遅く生まれ、十五年遅く進士となり、また十五年遅く死去。奇縁と言える良循環の後輩だ。

歐陽修の直系愛弟子で、文学者としての力量名声は師を凌駕した。官吏としては不遇の人生。書を読むこと万巻なるも、律読まず。「讀書万巻不読律」四四歳の時、死を覚悟。

黄州に流罪時「飲湖上初晴後雨」赤壁の賦」等の傑作。四九歳時には、王安石を訪交歓。人生、あざなえる繩の如く。止揚の哲学か。

晩年、陶淵明に次韻した「東坡和陶詩」等惠州・海南島での、巨視の作品が待たれる。

桜庭先生のご健勝を祈念し、名講義をご期待下さい。ホームページの全講義内容・写真等は、手軽に再生可能。ぜひ、一視聴下さい。

会員のたより

私の好きな漢詩

— 漢詩へのさまざまな思い —

自分の名字が入った詩に魅せられる

九詩期会 牛山知彦

九日齊山登高

杜牧

江涵秋影鴈初飛 江は秋影を涵して雁初めて飛び
 與客攜壺上翠微 客と壺を携えて翠微に上る
 塵世難逢開口笑 塵世口を開いて笑うに逢い難く
 菊花須插滿頭歸 菊花須らく満頭に挿して帰るべし
 但將酩酊酬佳節 但だ酩酊を將つて佳節に酬いん
 不用登臨恨落暉 用いず登臨して落暉を恨むを
 古往今來只如此 古往今來只此くの如きのみ
 牛山何必濁霑衣 牛山何ぞ必ずしも独り衣を霑さんや

神漢連に入会する前、あまり漢詩の内容も

理解せずに書作対象の漢詩を探していた時、自分の名字が入った漢詩を見つけました。

これは面白いと、自宅の襖二枚にこの詩を書きました。その襖の書を眺めるうちに、くよくよせずに生きていこうという大意を徐々にかみしめて、大いに励まされています。

その後、九詩期会の「江南漢詩の旅」蘇州滄浪亭での日中交流会の席上揮毫でもこの詩を書かせてもらいました。「牛山」の部分を通して名前を説明したのもいい思い出です。

私が衝撃を受けた詩

十期会 高田宗治

古詩 其十四 無名氏 (六句抜粹)

去者日以疎 去る者は日に以て疎く
 生者日以親 生くる者は日に以て親し
 古墓犁爲田 古墓は犁かれて田と爲り
 松柏摧爲薪 松柏は摧かれて薪と爲る
 思還故里閭 故の里閭に還らんことを思い
 欲歸道無因 帰らんと欲するも 道の因無し
 注「生者」は「名句でたどる漢詩の世界」(小学館)に基く

私がこの詩に出会ったのが七十年代前半で、最も衝撃を受けた詩の一つである。

この詩は『文選』に「古詩十九首」として収録された五言詩の一首で、「生と死」という永遠の主題が横たわっている。リアルに素朴に表現された類い稀なる作品と言える。

「去者と生者」忘却の彼方へと忘れ去られてしまふ死者と、日ごとに親しみを増してゆく生者と対比させながら更に悲しみを誘う。

「古墓と松柏」長い年月を経て思い出深い墓や松柏がいつしか畑や薪となり、元の姿が消え果てた現実につれなさを感ぜさせる。

「思還と欲歸」死者たちが故郷の村に戻りたいとして、その辿るべき道さえ無いと嘆く旅人の寂しさがしみじみと伝わってくる。

この詩は十句から成り立っているが、人の世の常をここまで表現できるとは実に驚きである。正にこの詩こそ漢詩の凄さを見せつけられた思いがしてならない。「漢詩の魅力ここにあり」ともいえる名詩であろう。

大正天皇の漢詩

五友詩林会 大野若人

過目黒村 大正天皇

雨餘村落午風微 雨余の村落午風微なり
 新緑陰中蝴蝶飛 新緑陰中蝴蝶飛ぶ
 二漾芳香來撲鼻 二様の芳香来りて鼻を撲つ
 焙茶氣雜野薔薇 茶を焙るの氣は雜わる野薔薇に

大正天皇の詩は、石川忠久先生の著書で紹介されている。歴代天皇のなかで漢詩を一番多く作られたそうである。

この詩で詠った目黒は、私がかつて勤務した職場にさほど遠くない。ここは江戸時代、武家屋敷がある地域を別として、農村である。皇太子として過ごされた明治において、目黒川を西に越えると、畑が広がり、歌川(安藤)広重の浮世絵にある富士も見えただろう。この詩を読むと、目黒の静かな風景が浮かび、大正天皇の自然と庶民を愛するお人柄が伺える。

この詩は難しい詩語や表現を使うことではなく、わかりやすく、また率直な表現が見られる。起承と転結の詩語を呼応させているところと、二様の芳香が雑わるなど、漢詩創作をする者として上手いと感じ、参考にさせてもらいたい詩である。

大正天皇は、全国各地を巡啓され、私が育った舞鶴のほか、各地の情景や想いを詠っていて、センスを感じさせ、親しみを感じる詩が多い。

会員の声

—多彩な会員の漢詩との出会い—

独り言

志詩会 鈴木拓子

「この子と目があったとたんに、わかつたの。お互いを必要としているって」と、満面笑顔の友人が、スマホに写っている子犬の写真を見せる。勘違いか、思い込みだと思うのだけど。幸せならいいか。

漢詩の勉強を始めた頃、暫くの間頭がちやちやこちゃしていたのは、その勘違い、思い込み、誤解の魔界のせいだった。

日本語しか知らないのに、漢詩を作ろうなんて。だいそれた事に向き合って、一ヶ月、六ヶ月、一年二年と経ってしまった。初心者講座からだと三年も過ぎた。にもかかわらずまだ迷路の中にいる。

漢字の意味が、日本語とこんなにも違うとは驚きだ。辞書を開かなくても、この詩語なら違いはないだろうと、手抜きして詩作をすると鋭い指摘を受けた。

「和習」という言葉を最近知ったが、私はずっとその中で溺れていたわけだ。和習の言葉の下に「和臭」とも書いてあった。自作の詩は少し、又は大分臭っていたのかも知れない。中国語はドラマでしか聞いたことは無く、有名な漢詩を全く知らず、また読もうともしない。努力不足のこんな私でも、現代にタイムスリップした唐代の人間に、いつかなりたいと切に望んでいる。

高啓、我愁從何來詩管見

三水七歩会 大谷明史

「我愁從何來、秋至忽見之。欲言竟難名、泯然聊自知。(我が愁は何より来たる、秋至れば忽ち之を見る。言わむと欲するも竟に名づけ難し、泯然として聊か自ら知るなり)」

御承知の通り、これは全三十句から成る高啓の詩の冒頭四句である。凡そ六十年の昔この詩を初めて目にして、これは漢詩形式を以て詠じた近代詩ではないかとの感を得た。

作者は秋と共に忍び入る憂愁の念の存在に悩み、その発生事由を探索するが見出し得ない。事由不明な事が作者の意識を更に不安定にする。(実は自身の運命を漠然と豫感したのかも知れない)この過程で、探索する自覚的自我は自己内の憂愁を他者として客体視して居り、作者特有の苦吟(「青邱子歌」参照)の結果、徹底的に内向的な三十句の古詩が生み出された観がある。かかる内向性が、後世の無学な読者の眼には近代的に映じたのである。(一方李白「抽刀斷水水更流、舉杯銷愁愁更愁」の句は自我と愁いが主客一体を成す「古典的」名吟であろう)

処で、胸底の「悲哀」の事由を見出せぬ苦痛を詠じたのはヴェルレーヌである。十四世紀の漢詩人と十九世紀のフランス詩人とは、詩風も生き方も全く異にしつつ、共に不安定なる自我の様相を安定した定型詩の形式を以て表現した。それが詩人だ、と声が聞こえる。

遅々として上達しない者のつばやき

九詩期会 武田一郎

漢詩に関しては、中級に届いているかどうかとも怪しい私が「漢詩神奈川」に寄稿してほしいと云われ、戸惑っているが、最近感じていることを少し書いてみたい。

鷺野先生の「中級のための漢詩創作」の中に、「漢詩は、外国の古典語を使う外国の詩」とか、「詩は「おもい」を「詠う」もの…心を凝らし、「おもい」を純粹にし、「言いたいこと」伝えたいこと」を明らかにし、それを「詠う」と指導されていますが、現代・日本で生まれ育った私には、中々感覚的に追従出来ないものがあります。その背景として、産業革命の前後(古代から現代)では、交通手段や通信手段、生活環境・様式等が様変わりしていることや、国・民族・文化・気質(中華思想・道教の影響等)・気候風土・歴史的背景等の違いがあると思っています。

『漢詩を味わう』と云うことに関しては、その漢詩の作られた時代背景や作者の人となり、人間関係、地理的条件等を知り、更に典故が使われていれば、その典故に関する故事を調べ、それ等を踏まえて、作者の詩に込めた「おもい」を理解・共有して味わうということは可能だと感じているが、『漢詩を作る』と云うことに関しては、先に述べた様々な違いから、「適切な詩語がない」とか、「感覚的にしっくりこない」とかに悩まされ忸怩たるものがある。

「閑適・隠逸」の詩

逸語会 田内 隆

漢詩のテーマのうち、「閑適・隠逸」を私は特に気に入っています。そのきつかけとなったのは、夏目漱石が『草枕』の冒頭で、漢詩の「閑適・隠逸」の魅力語っていたからです。

「とかくこの世は住みにくい」と観じた主人公の画家は、「非人情の文学」、「俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩」を求め、西洋にはその種の詩はないが東洋にはある、とし、その代表として、陶淵明の『飲酒其の五』「菊を採る東籬の下悠然として南山を見る」と、王維の『竹里館』「独り坐す幽篁の裏、…」を挙げ、「超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる」等々と絶賛している一節です。

私は元々趣味で俳句をやっていて、この『草枕』も漱石自身が「俳句的小説」と名付けていたために読んだのですが、この一節に触れ、漢詩の「閑適・隠逸」の魅力に強い感銘を受けました。俳句の「花鳥諷詠」とも通じるものがあると感じました。それ以来、漢詩の世界に徐々に分け入るようになり、会社を辞めた二年程前から、湯島聖堂と朝日カルチャーセンターで、主に陶淵明と王維を勉強しています。このような訳で、私の作る漢詩も「閑適・隠逸」に偏っています。が、今後も、愛好する詩の境地を学び（真似て）詩作に取り組んでいきたいと思っています。

ようやく意味を知ることができた漢詩

既望会 小島数子

楓橋夜泊

張継

月落烏啼霜滿天

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

夜半の鐘聲客船に到る

小学校に行くようになってから、寝る部屋の床の間に、掛軸が下げたことに気づいた。何て書いてあるのと、私は父に何度も訊ねたがいつも、有名な漢詩だ、まあ読んでみてくれと答えるばかりで、父も意味が解からず下げたのだ。眠ろうとすると、毎晩のように目に入ってくる漢詩を、私はひとり何年も眺め続けたが、ほとんど読めず意味が解らず、漢詩とは何と難しいものなのだろうと苦しみ、掛軸を外して欲しいと願った。だから中学生になってしばらくして、その部屋で寝なくていいようになった時は、ほっとした。そして高校生になって漢詩を習った時に、読み方があるということを知った。父母が亡くなり、誰も住まなくなった家の暗い床の間に、今でもまだ下がっている掛軸のことを思うと、このまま、書かれています。漢詩の意味を知らずに終わりにするのは良くないと考えた。それで、最近になって漢詩の本を買って、月で始まり、霜や天の文字が遣われている詩を探したら、載っていた。

木版画と漢詩

金星干支会 福田忠夫

七十歳になり木版画を始め写真ハガキで三〇字程漢字を並べて送っていたところ俳句の先達から「きちんと漢詩を習いなさい！」とお叱りを受け数年前に干支会で三村先生・新井先生のご指導を受けるとともに窪寺先生の「漢詩実作」を受講。錚々たる諸先輩の中で毎回代作ばかりで木が折れそうになりましたが「君はなかなか打たれ強いね」とか「めげずに続ける事が大事だよ」と励まされ、現在は後藤先生にご指導を受けております。



漢詩については出来るだけ平明に日本人の感性に合う表現にするよう心がけておりますが、和臭や現代語使用不可や簡化字・旧字体の辞書引きの手間や日中の季節のズレなど漢詩では反則になることが多く難儀しております。

長濱曳山祭「子供歌舞伎」

春漲江州社日天 春江州に漲る社日の天

神前舊劇舞衣鮮 神前の旧劇 舞衣鮮かなり

兒童切切餘情語 兒童切切と余情語り

窈窕柳腰又可憐 窈窕の柳腰 又可憐

九月に十周年の木版画展（一部漢詩付）をアートフォーラムあざみ野で開催予定です。

「令和四年度 全日本漢詩連盟
設立二十周年記念大会」
神漢連会員活躍

二松学舎大学学長賞

高橋純子

江都雪景

江都雪景

月冷深更雪已収 月冷やかにして深更雪已に収まる
朔風吹袂水邊樓 朔風袂を吹く水辺の楼
皚皚九陌人蹤絶 皚皚たる九陌人蹤絶え
只見墨江分二州 只だ見る墨江の二州を分かつを

二州という言葉を知ったのは、服部南郭の「夜下墨水」という詩でした。

金龍山畔江月浮 金龍山畔江月浮かぶ
江搖月湧金龍流 江揺らぎ月湧いて金龍流る
扁舟不住天如水 扁舟住まらず天水の如し
兩岸秋風下二州 兩岸の秋風二州を下る

二州とは隅田川を境とした武州と総州のこと。いつかこの詩語を使い隅田川を詠んでみたいと思っていました。人々が寝静まった夜更けの東京。夜空に浮かぶ白い月、雪景色の中を流れる隅田川。音の無い白と黒の景色を表現できればと思いました。

この度は、身に余る賞をいただきました。これからも精進してまいります。

日本詩吟学院賞

不懐都

都を懐はず

五嶋美代子

山如高閣聳嶙峋 山は高閣の如く聳へて嶙峋
鳥若街衢喧噪頻 鳥は街衢の若く喧噪なること頻りなり
京邑遙遙千里外 京邑遙々千里の外
何愁漫叟不逢人 何ぞ愁へん漫叟人に逢はざるを

この度は栄えある特別賞を賜り、大変うれしくまた恐縮に感じております。私は2018年の初心者入門講座で初めて漢詩の手ほどきを受け、その後サークルでご指導いただきました。今回の作品のヒントも鑑賞会Aでいただいたものですので、受賞はすべて神漢連のお陰ということになります。本当に有難うございました。

この詩の題は都を懐わずとなっておりすが、本当は都が懐かしくてしょうがない気持ちを詠んだものです。社会の第一線を退いた



方は、清々したと口では言っても心のどこかでかつての忙しくも充実した日々を懐かしく思うものではないでしょうか。私自身のそういった気持ちを作品にしたものです。

斯文会理事長賞

廣田雅人

都城大雪

都城の大雪

亂飄雪後靜無風 乱飄の雪後静として風無く
紫陌高樓一白中 紫陌高樓一白の中
日出雲端光曄曄 日出雲端を出づれば光曄々
都城忽變水晶宮 都城忽ち変ず水晶宮に

この度は、思いがけず大きな賞を頂きました。漢詩大会には初めての応募でしたが、全漢連二十周年の節目での受賞は、重ねての喜びです。

この詩はテレビの雪のニュースから、若い頃の都心の大雪を思い出したことが切っ掛けでした。吹雪の夜に徹夜仕事をした翌朝、雪に埋もれたビル街に陽が射して街全体が殊更に眩しく清々しかったことが心に残っており、塵雑な都会で得たつかの間のその澄んだ情景と心持ちを表現したいと思いました。

一詩に仕上げるにはいろいろ苦心しましたが、幸い諸先生のご指導がたまたま噛み合ったことで、このような賞が頂けたかと思っております。今後もこうした詩がひとつでも多く詠めるよう、精進して参りたいと思います。

秀作

京洛旗亭聽琴

京洛の旗亭に琴を聴く

大野若人

過山紫水明處

山紫水明処に過る

水城まゆみ

京洛旗亭夜色深

京洛の旗亭 夜色深し

樂師閑坐奏鳴琴

樂師閑坐して鳴琴を奏す

五音清響寒燈下

五音清らかに響く寒灯の下

遊客方知千古心

遊客方に知る千古の心

東山山麓鴨川西

東山山麓鴨川の西

詩伯舊居茅屋低

詩伯の旧居 茅屋低し

猶見書齋翻筆墨

猶お見る書齋 筆墨翻るを

水天一髮壁間題

水天一髮壁間の題

入選作品

都城春景

都城の春景

松本祐輔

天晴風暖柳絲垂

天晴れ風暖かくして 柳糸垂る

盎盎春光到處宜

盎々たる春光 到る処宜し

爛漫櫻花絳葩舞

爛漫たる桜花 絳葩舞い

御溝水碧更增奇

御溝水碧にして 更に奇を増す

鎌臺古道名越切通

鎌台の古道 名越切通

横溝喜久男

鬱蒼樹蔭草葉繁

鬱蒼たる樹蔭 草葉繁く

綠鮮巨巖妨駿奔

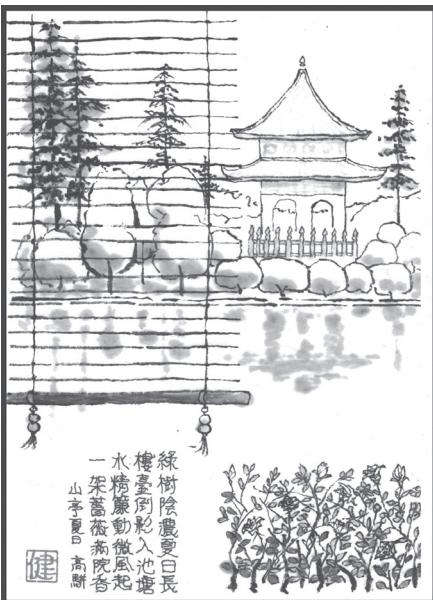
緑鮮の巨巖 駿奔を妨ぐ

曾是牙城要衝徑

曾て是れ牙城 要衝の徑

今無人訪鳥聲喧

今人の訪う無く 鳥声喧し



令和五年の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう!

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページから入手できます。

令和五年度全日本漢詩大会

全国漢詩の祭典ーいしかわ百万石文化祭 2023

十月二十八日 表彰式 石川県小松市

応募完了

令和五年度全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会

詩題「雲」

応募期間 八月一日〜十月三十一日

応募資格は全日本漢詩連盟の会員

U-23対象者は非会員でも応募可(応募無料)

第二十六回全国ふるさと漢詩コンテスト

十一月二十五日 表彰式 多久市

詩題「宿」

応募締切 八月十八日

第八回漱石記念漢詩大会

大会は開催されずHP上で入賞者公表

自由題 応募完了

諸橋轍次博士生誕百四十周年記念

第十五回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月十一日、十二日

自由題・生誕記念の部

応募締切 七月三十一日

神奈川県漢詩連盟 令和五年の行事予定

カレンダーに予定を記入しよう

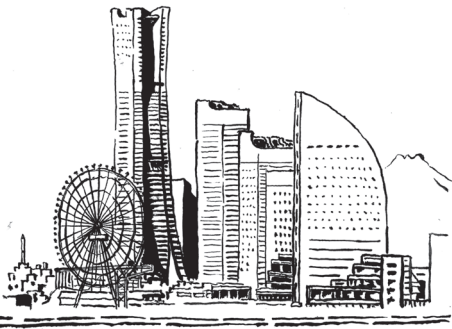
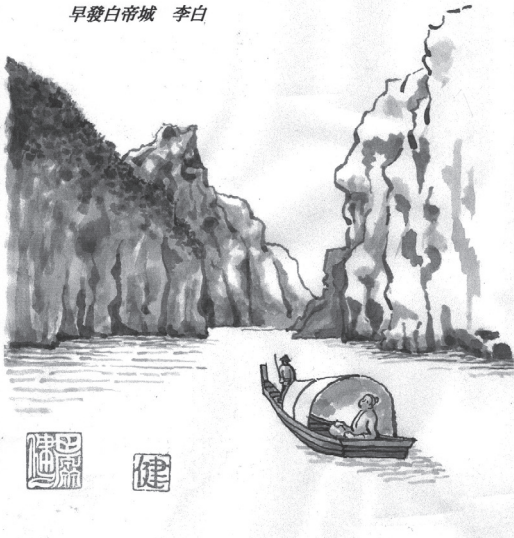
●オンライン吟行会

オンライン吟行会を八月二十四日(木)に開催します。
 開催日が近くなりましたら、メールアドレス登録者全員に参加の可否を問合せし
 ます。奮ってご参加ください。
 なお、明年二月にも開催予定です。詳細は、追ってお知らせします。

●漢詩講演会

期日 十一月一日(水)
 時間 午後二時～四時
 場所 神奈川近代文学館
 講演者と演題 横浜国立大学准教授 高芝麻子先生 演題は未定。
 参加申込 不要。会員以外も参加可能。無料。

朝辞白帝彩云间
 千里江陵一日还
 两岸猿声啼不住
 轻舟已过万重山
 早發白帝城 李白



挿絵は故田原健一氏作を使用させて頂いています

編集後記

神奈川県漢詩連盟は五月三十日総会より新体制でスタートいたしました。会報も編集メンバーに田内隆を加え、東島正樹、高橋純子の三名となりました。宜しくお願いいたします。

鷺野先生の講演会では、杜甫の憂いの底にある人間の生命力、家族への深い愛情などを
 知ることができました。是非YouTubeをご覧
 ください。そして今、私の手元には本棚か
 ら出してきた杜甫の詩集が。鷺野先生の積義
 をお聴きして、読んだつもりになっていたの
 だとはつきりと気づかされました。再度じっ
 くり読みたいと思います。

講演会の後、KKRポートヒル横浜に於いて
 約三年ぶりとなる懇親会が開催されました。鷺
 野先生から頂戴した玉韻を住田先生が吟詠さ
 れ、続いて鷺野先生への質問コーナーや退任さ
 れる方々に感謝を込めて童謡「故郷」の替え歌
 を皆さんと合唱し、楽しい時間を過ごしました。

神漢連では春と秋の年二回講演会を開きま
 す。その講演会も毎回楽しみなのですが、実
 は同じくらい心待ちにしていることがあります。
 港の見える丘公園の色とりどりのバラで
 す。綺麗に手入れされ素晴らしい。これで漢
 詩ができればいいこと無いのですが、なか
 かなか手くいきません。せめて詩囊を肥やすこ
 とだけでも、マスクを少しずらして香りを
 深く吸い込みながら神奈川近代文学館に向
 かっていきます。
 (高橋純子)